



ただ「受け止められる」存在があること

藤女子大学ウェルビーイング学部子ども教育学科 教授 高橋 真由美



先日、異年齢保育をしている園の保育者であるAさんから、0歳児クラスに遊びにくる5歳児B君のエピソードを聞きました。その園では、新学期始まって間もない頃の朝の時間帯に、0歳児の部屋に5歳児がよく遊びにくるそうです。その日もB君が登園後すぐに0歳児の部屋にやってきて、カーペットスペースにいる赤ちゃんの横に寝そべり、何をしてもなくごろごろしていたそうです。Aさんがその様子を見守っていたところ、B君が赤ちゃんに「俺、お部屋に行きたくなんだよね」とつぶやいていたそうです。この出来事についてのAさんの捉えは以下のようなものでした。



とを担任保育者から聞いていたため、Aさんは0歳児の部屋に遊びにくるB君の様子を見守っていたそうです。なぜB君は赤ちゃんに向かって自分の部屋に戻りたくないといふのかと考えた時に、Aさんは、B君にとって今一番必要なのは、この赤ちゃんのようには、自分の行動に対して何も評価せず、丸ごと受け入れてもらえる感覚になる存在だと気付いたそうです。現にそのあと、B君は赤ちゃんの顔を覗き込み、様子を見つめて少したつと、自分の部屋に戻っていったそうです。この話を聞いて、私はB君に「自分の部屋に行きたくない」と言われたら、どうするだろう?と考えました。「そうなんだ」と一度受け止めたとしても、「ここに居てもいいよ」という肯定的な言葉や「お友達がお部屋で待ってるんじゃない?」などの部屋に戻ったほうが良いというメッセージを伝えてしまうように思いました。もちろん、この言葉かけは間違いではありません。しかしながら、自分の部屋に戻らなければならぬことをわかっているのに、そこに気持ちが向かないB君にとって必要だったのは、励ましたり論じたりする存在ではなく、何も評価されることなく、ただ自分の気持ちを吐き出せる存在だったのかもしれないと思いました。そのような場があることで、B君は自分で自分を立て直すことができたのかもしれない。

私が高校時代に知った歌に「you are near」という曲があります。70年代「アメイジング・グレイス」などと共に若者がギター伴奏で良く歌っていた曲で、詩篇139を非常に美しい旋律で歌い上げたものです。教会に行き始めた頃とあいまって、「私がいつでも主は共にいてくださる」という内容の歌詞は私をわくわくさせました。英語の歌ですが、その旋律の美しさと聖書の詩篇をほぼそのまま歌っているの、意味もよく理解できます。神父になつた時に担当した教会の高校生たちは自分の曲の歌集にこの曲を載せて好んで合唱をしていました。



な)発見をした時。そして、今までできなかったことができるようになった時。新しいことに挑戦しようとする時等、「見られている、見守られている」という安心感の中で彼らは心も身体もぐんぐん成長していきます。「見て、見て」と先生の名前を呼ぶ彼らの姿は、信頼して神に呼ばれる信仰者の姿と同じだと感じたのです。

一方、幼児洗礼を受けて、小さいころから教会に通っていたある青年が言っていたことも思い出しました。彼はこう言ったのです。「僕はずっと、ミサの中で繰り返し唱えられる『世の罪を除きたもう主よ』という言葉はずうっと『世の罪を覗きたもう主』だと思ってたよ。彼にとって神は天にあって、地上の私たちの心をのぞき込み、

しばらく歌うことも思いつくこともなかったこの歌が心に浮かんだのは、幼稚園の子供たちを見ていた時です。学期はじめ、幼稚園に慣れて元気に遊ぶようになった園児たちは、事あるごとに先生たちに向かって「見て、見て」を繰り返します。花や虫を見つけたり不思議に思えることを見つけたたりして小さな(彼らにとっては大き

どんな小さな悪さも見逃さず見通される神、どこへ行っても逃げることのできない恐い神だったので。もし私たちが信じている神がそのような方であるならば、神を信じることは悲劇です。私たちにあって神は、幼子のように「見て、見て」と信頼と安心感を持って呼ばれることのできる親しい神です。

多くの愛に包まれながら

大麻藤認定こども園 保護者 高橋 美愛



温かく見守ってくださる先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。我が子が毎日「楽しかった!」と笑顔で帰ってくるのが、親にとって何よりの安心であり、幸せです。

子どもたちにとって初めての社会が、この園で良かったと心から感じています。これからも多くの愛に包まれながら、子どもたちらしく生き生きと園生活を送ってほしいです。

「これから出会う多くの人を愛し、そして愛され、素敵な関係で結ばれますように」。そんな願いを込めて、子どもたちの名前をつけました。

その願いの通り、園では多くの友達や先生方、保護者の皆さんとの温かな出会いに恵まれ、3人とも毎日楽しく



通っています。

年長児の娘は、異年齢混合クラスの中で思いやりの心を育み、年下の友達に優しく寄り添う姿を見せてくれるようになりました。2歳児クラスの息子は、友達と関わる楽しさを知り、友達のおかげで息子の世界が日々大きく広がっています。そして0歳児クラスの息子は、毎日新しい表情を見せてくれ、その成長を保護者の皆さんと一緒に喜んでくれる環境に親としてとても支えられています。

3人それぞれ性格も成長ペースも違いますが、一人ひとりに丁寧に寄り添い、

幼稚園で「神様のお話」をしてくださるチャプレン(神父様)からのお話です。

高いお山

チャプレン 千葉 充 神父



教えて! チャプレン

札幌教区の司祭となって三年目を迎えました。まだまだ駆け出しといったところでしょう。司祭になる以前の社会生活では、学生などの若い世代と向き合うことはあっても、小さなお友達と関わる機会はありませんでした。ですから、チャプレンと言われても、何をどうすればいいのか、何も分からず、先輩の神父様達にアドバイスを受けながらのスタートでした。

ある日、朝のミサを捧げてから、こども園でのお誕生会、お昼にお葬式を司式し、その足で病人の見舞いに駆け付け、夕方に司祭館に帰ってくることがあ

りました。そんな日の出会いは、まさに「ゆりかごから墓場まで」のような幅を持ち、頭と心が混乱するようなこともありました。最近になって、ようやく小さなお友達との出会いを楽しむ、心のゆとりが生まれてきたようです。お誕生会のお祝いやお祈り、そしてお話の時など、みんなの真剣な眼差しと、元気のよい応えに、喜びを感じています。

こども園・幼稚園に限らず、教会でも子供たちとの関わりが少なからずあります。ある時、男の子が教会の庭で砂山を作って遊んでいました。彼は大きな

山にしようと、一生懸命に砂をかき集めています。よくよく眺めていると、裾野を広くとり、高く高く盛り上げていきます。このように、高い山には、広い裾野が必要です。ただ高さばかりを求めているのは、風ですぐに倒れてしまいます。裾野は広く広く、どこまでも広がることで、より高みを目指すことができるでしょう。

「小さなお友達」との関わりは、今、私自身の狭い裾野を広げてくれる大切な時間となっているようです。

認定こども園虹の森カトリック幼稚園

保護者の方からの温かいメッセージ

保育教諭 小野寺 永羽

新緑の季節を迎え、園内には子どもたちの元気な声が響いています。入園から早くも二ヶ月たち、園生活に慣れてきた年少児の中にも、行事などでお家の方が目の前に来ると、急に甘えたい気持ちが勝って離れられなくなってしまう子がいます。

先日のお誕生会では、普段は意欲的な子が涙を流して葛藤していました。私は「一步踏み出す格好良い姿を見てもらおう」と、泣き叫ぶその子をなだめながら、お家の方から離す関わりをしました。無事にやり遂げたものの、「これで良かったのだろうか」と私の心には不安が残っていました。

しかしその夜、保護者の方から「いつも子どもが離れられず悩んでいたが、先生のおかげで成長を感じられた」と、温かいメッセージをいただいたのです。迷いながらの自らの実践が、保護者の方の言葉によって深く救われ、これからも頑張ろうと前向きになりました。

保育者の関わりが正解だったかを教えてくれるのは、いつも子どもたちであり、保護者の方からの温かい言葉です。これからも一人ひとりの育ちを保護者の皆様と共に喜び、子どものためになる丁寧な関わりを模索し続けていきます。



認定こども園岩見沢天使幼稚園

縦割りクラスで育つ優しさの輪

保育教諭 小玉 未紗乃

今年度、新しく『にじいろ組』となった子ども達。虹色のような楽しい時間を過ごせるようお願いを込めて、殻の部分を虹色の輪つなぎで表現する『かたつむり製作』を行いました。

縦割りクラスでは、日頃から異年齢のペアで助け合って活動をしています。この日も製作中、折り紙がうまく輪に通らない時には手本を示してくれた年長さん。年少さんが自分で折り紙を通す瞬間まで見守る姿がありました。また、途中で手が止まった友だちに気づき、作業を分担することを提案したり、輪を通すことが難しい友だちには糊をつける役割をお願いして一緒に取り組んだり、まるで優しい先生のような姿も見られ、それぞれの得意なことを生かしながら活動に取り組む子ども達を微笑ましく感じました。

相手を見守ったり、困っている時には手を差し伸べたりと互いの思いに寄り添いながら過ごす子ども達。そのような関わりの積み重ねが、思いやりや憧れの気持ちを育み、共に育ちあう豊かな環境につながっていると感じています。

これからも異年齢の仲間同士が支え合う関わりを大切にしながら、一人ひとりが互いを認め合い、その優しさの『輪』が平和な世界へ広がっていくことを心より願っています。



認定こども園倶知安藤幼稚園

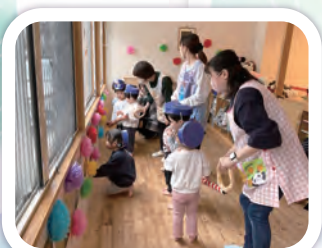
神様とお話

保育教諭 飛岡 ちさと

お心を静かにして神様とお話をする時間、それはお祈りの時もあれば、朝や帰りにマリア様の御像に会った際にすることが多く、常に神様を身近に感じている子どもたちの姿は、清らかだと感じています。

ある日朝の自由遊びで絵を描いていた女の子が、「先生、この絵をお外に向けて飾って?」と素敵な虹が描かれた絵を渡してくれました。理由を尋ねたところ、「神様が泣いているから雨が降っているんだよ。だから神様が喜ぶように絵を描いてあげたの!」と。相手の気持ちに寄り添い、どうしたら相手が喜んでくれるか、思いやりの気持ちが育っていることを強く感じた出来事でした。

また他の日には、お友だちと一緒に園長先生を誘いマリア様の御像に向かい「主の祈り」や「アヴェマリアの祈り」を唱えている子。マリア様にお捧げしたいと大事そうにたんぽぽを握って登園する子。子どもたちが様々な形で神様と関わる姿を見ることができ、温かい気持ちになります。藤幼稚園から卒園していく頃には、相手が喜ぶ姿に幸せを感じる、優しい子どもたちが育っていくことを願っています。



カトリック聖園てんしのおうち

思い出の写真バスツアー

保育教諭 山中 萌

てんしのおうちでは3月に2歳児が卒園し、4月からこどもの家へ進級するため、「進級おめでとう会」という行事があります。

歌や踊りの発表、賞状などのプレゼントがある中、1年前から『思い出の写真バスツアー』というものが加わりました。それは、2歳児の子どもたちの入園当初の写真を廊下一面に貼り、子どもたちがバスの車掌さんとなり、思い出の写真を巡っていくというものです。0歳児から入園した子だけではなく、1歳児、2歳児から入園した子もいます。それぞれの子の入園当初の思い出が蘇り、私たち保育者だけではなく、保護者の方々、子どもたちまでもが喜んでくれる素敵な時間となります。

「これ〇〇だ!」と自分の小さい頃の写真に気付く姿、「〇〇ちゃんだ!」「〇〇くんいるよ!」と小さい頃のお友達に気付く会話を弾ませる姿がとても微笑ましく、卒園児、在園児の保護者の方も入園当初の子どもたちの姿や当時の気持ちを思い出し、涙する場面も見られます。

てんしのおうちでの短い園生活ですが、子どもたち、保護者の方と泣いて笑って過ごした日々や時間は私の成長の一つになっています。この行事が私にとって思い出を振り返られる大切な時間となっています。

